# 海外研修を経験して～働き方や業務についての検討～

◎小玉 あかね[1)]、一村 健一[1)]、大塚 雅文[1)]、池上 新一[1)]
社会医療法人 雪の聖母会 聖マリア病院[1)]

【はじめに】2019 年 11 月に当院と姉妹病院提携を結んだオーストラリアにある Princess Alexandra Hospital（以下 PAH)で 1 カ月間研修を行う機会を頂いた。他国での研修を経験して海外と日本の検査室と比較し、今後の働き方や業務改善について検討したので報告する。【比較内容】職員数、勤務シフト、検査技師の業務範囲および業務内容について比較した。【結果】PAH は総職員数 5800 人/780 床、検査職員数 160 人、検査専属事務 21 人、当院は総職員数 2011 人/1097 床、検査職員数 65 人、検査室事務は 2 人と、職員数に圧倒的な違いがあった。24 時間運用は同じだが、当院が 2 交代制であるのに対し 6 交代制を行うなど充分な人員を確保されたなかで効率的に業務が行われていた。業務範囲に関しては大きく微生物学・生化学・病理学・血液学の 4 部門に分けられており、私が現在所属している生理検査に該当する部門は存在しないがエコー検査は sonographer、心電図検査は physiologist、また採血は phlebotomist がそれぞれ検査を行い各スペシャリストが業務に特化していて横断的業務はない。研究も熱心で scientist な部分も垣間見えた。エコー・心電図検査は完全予約制で患者を待たせることなく検査されていた。コロナ流行前であったが、機器の消毒や患者毎にシーツを変えるなど感染対策もしっかり行われていた。州立病院では電子カルテや検査システムが確立しており連携する全病院のデータが回覧可能となっており、各病院で全項目、全機器で共通の SOP が準備されていた。小規模病院は最低限の検査のみ自施設で行いその他の検査は大規模施設へ検体を搬送するシステムであり、州立病院規模で医療を支えていた。【まとめ】日本の検査業務とは内容や働き方、意識など大きな相違があった。外国に比べ日本の検査技師の業務は多く、更にタスクシフトも始まり業務拡大が進む一方専門性も求められ、限られた人数での業務の効率化、働き方の見直しなど重要となってくる。当院では、まずは感染対策を中心に業務の改善を試みた。今後、業務の改善、効率化を進め更なる業務拡大が行えるのか検討を進めていきたい。

連絡先：0942-35-3322（内線 2106）